

替人召置候共、是又割場の可申斷事。

一、増給銀其外跡々可爲如御定事。

以上

寛文八年正月廿一日

二三 出替期限後不有付奉公人之儀等觸

覺

一、御家中一季居之下々、三月廿日限不有付、奉公人に宿借置候もの有之候歟、奉公人自宅に隠有之、或日用或商等仕者於有之者、露顯之上可爲曲事。但、百姓之者在所へ引込不申候而は田地あれ申由、十村へ斷之族有之候者、御郡奉行・御改作奉行吟味之上、御算用場御奉行爲申聞、可受指圖事。

附、病人は其所之肝煎聞届、公事場可及斷、病氣本復仕有付候は、御定之給銀日割を以引落、残り分可相渡候。若又主人非分申懸候は、金澤に而は公事場、於江戸は割場御奉行可申斷事。

一、奉公人召抱候節、相對を以、品を替御定給銀之外増銀等遣族候は、主人可爲越度候。但、年季迄奉公人、并季を重召仕候においては、増銀各別之事。

一、鎗持・馬捕・草履取、跡々如御定、狀箱等之輕き器物可持候。居屋敷廻り普請・掃除等之儀は勿論之事。乗物昇・平小者之分は、大小によらず荷物もたすべき事。

右之趣先年茂申觸候通、彌相違無之様に、御組中家來末々迄急度可被相觸候。御披見以後御名之下御判形可被成候。以上。

延寶七年二月晦日

松平玄蕃

玉井勘解由

菊池十六郎

二四 奉公人欠落之儀覺

寶永三戌年欠落人之儀に付伊藤平右衛門

被申聞候趣。

一、請人に立候者、御大法は欠落仕候得ば、請人共爲尋罪之輕重により、他國迄も爲尋申候。欠落人取逃仕候得ば、

請人共より辨申候。給銀之儀は、日割を以是又辨申候。且

又請人の相立申に付、過錢一人に二貫文充指上申候。辨銀過分に而、請人共年季に茂難出候者、過錢被下候事。

一、欠落人、三年之内請人共尋出候得ば、辨銀・給銀・過錢等迄被返下候。此外御定等無之候。然所に欠落人殘候道具、只今迄は請人共呼寄爲改、自分之家來に相封爲致申躰に候得共、向後自分家來に爲相改申管に候。小身に而爲改申者無之方は、自分改置可申事。

公事場より關所と申渡候時分主人の申渡候事。

一、家來縮仕候もの小身之方、唯今迄は請人共呼寄預け置、晝夜附置申躰に候。請人之内、或主人持、或は輕き家持等に候得ば難儀に候。向後は小身に而附置候家來も無之躰之方は、一人充請人之内替々附置可申候。附置候家來等有之方、請人附置不申管之事。右之通被申聞候。

二五 一季居奉公人高給銀制止之儀等御定

御家中之奉公人給銀之儀、大抵古來御定茂有之候處、其以來猥に罷成、近年は別而分限不相應之高給銀を望、下々申度儘之様に罷成候得共、先其分に而嚴重之沙汰に茂及不申候。畢竟頃年收納米下直、主人之入用銀各別取劣り申上に、下人而已成來候通之給銀に而有之間敷儀に候。第一下々茂、衣類等を初花塵之爲躰に罷成候故、おのづから給銀を茂食不申候はでは難成候。今般御家中儉約之儀茂急度被仰出、歴々を初、先年之御定より萬端猶以事輕く相心得申儀に候。下々給銀、萬治四年之御定茂有之儀に候得共、其頃は收納米押ならし大概四拾五六匁之直段に候。當時は各別下直に候故、此度別紙之通給銀相極候條、家來共其嚴重に申渡、若違背之族有之候は、公事場において可違吟味候間、組支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配の茂申渡候様、是又可被申聞事。

（寶永十四年）
閏九月十八日

前田大炊

一季居奉公人男女給銀之事
役小者